

巻 頭 言

専門日本語教育研究の一方向（6）

だれが専門日本語を教えるのか

専門日本語教育学会長

大 坪 一 夫

(麗澤大学外国語学部教授)

私たちの間で以前議論のあった専門日本語をだれが教えるのかという問題は、いつの間にかうやむやのまま忘れ去られたような状態になってしまっています。今号では、この問題を特に取り上げ、そのためにどのような研究が可能であるかを示唆することにより、前号で述べた「何を」から「どう」への道筋を考え直してみようと思います。

専門日本語をだれが教えるかが問題になるのは、日本語教師が専門に関する十分な知識を持っていないこと、また、専門の教師が日本語教育に関する十分な知識を持っていないという矛盾からおきる問題です。実際、私は、某著名な大学院で言語学の論文を書いている日本人の学生が日本語の教師として日本語を教えている現場のビデオを見たことがあるのですが、教材の中に出てくる助詞の「の」の解釈をめぐる学生と教師の間で食い違いが生じ、結局学生たちの解釈が正しいという結果になりました。ですから、この矛盾を解消する方法を見つける必要が出てきます。必要なことはわかるが、本当にそんな都合の良い方法があるのかということが次の疑問となります。

思いつきの1つとしてコミュニカティブ・アプローチが浮かびあがってきます。西口光一（1995）『日本語教授法を理解する本 歴史と理論編 解説と演習』によれば、「強い」コミュニカティブ・アプローチは、そもそも言語はコミュニケーションをすることによって習得されると主張すると述べています。一口に外国語といっても、インドネシア語とマレーシア語のように両方の言語が非常に近く、片方の言語で話された／書かれた内容を聞いたり、読んだりして、その内容が別の言語の聞き手、あるいは、読み手に通じるような関係の言語間では上のようなコミュニケーションすることによって言語を学ぶことは可能であろうと考えます。もしこれが正しいのならば、ある程度日本語を習得した学習者を専門の教員のもとに行かせ、専門教育が施される場で交わされる会話や論文をインプットとして新しい言語項目を習得させることとなります。

また、イマージョン・プログラムが成功しているという話も聞きます。イマージョン・プログラムというのは、ある教科の内容を第2言語で教えるというものです。話は簡単ですが、果たしてこのようなことが上の問題に対する本当に正しい解答であるのかどうかは、実は不明です。

以前にも書きましたが、専門日本語の難しさの例として「ICを集積回路という」ことが原因であるとする新聞記事がありました。これは、明らかに間違いです。ICの専門家が日本語ではICを「集積回路」というのだということを知れば、素人に日本人が「集積回路」について知るよりはるかに多くのことを理解してしまうに違いありません。専門の語彙を学ぶことは、その専門家にとっては、全くたやすいことです。IC—集積回路, LSI—大規模集積回路という組み合わせを記憶すればよいだけの話です。この場合、

日本人も、話し言葉では、「アイシー」と言ったり「エルエスアイ」と言ったりするわけですから、日本語式発音の IC, LSI になれるだけの問題となり、問題はさらに小さくなります。

我々の問題は、だれが専門日本語を教えるのかでした。上述のように「強いコミュニカティブ・アプローチ」の主張やイメージ・プログラムの成功を受け入れてみようという提案もあります。果たして本当にこれでいいのでしょうか。ここから先が考えどころです。私たちは、このような試みをまだやったことがありません。どのような日本語学習者をどのような環境に投入すれば、最も効果的であるかについては何も知らないのだから、完全にゼロからの研究を始めることになります。特定の専門科目でのみの成功/失敗なのか、専門科目一般について答えが得られるのかについては何もわかっていません。徐々に一般化を目指すより仕方がないのかもしれませんが、一気に専門科目一般についての答えが得られるのかもしれませんが。専門科目についての学力と関係があるのかもしれませんが。日本語能力がどの程度ならば成功し、どの程度ならば失敗するかについても、我々は、何の情報も持ち合わせていません。

このように考えてくると、「専門日本語教育研究」と小、中学校の児童生徒の教科学習言語の習得の問題との重なりが気になり始めます。つまり BICS (Basic Interpersonal Communicative Skills) と CALP (Cognitive/Academic Language Proficiency) の問題です。前者については、まだ若い子どもたちですから大人に比べると習得は比較的容易です。しかし、後者については現在でもうまい解決策が見つかっておりません。我々が想定している専門日本語教育での日本語学習者は成人ですから認知能力に関してはすでに完成した状態を想定することができますが、小、中学校の児童生徒に関しては認知能力の発達というさらに複雑な変数が絡みます。我々の研究が子どもたちの教科学習言語の学習をより単純な形で解決できる糸口を提供できる可能性があるという認識は、非常に重要です。と同時に「専門日本語」という言葉の再確認も重要であるように思えてきます。

今号では、問題を「だれが専門日本語を教えるのか」という切り口から考え始めて、CALP の問題にたどり着きました。そして専門日本語を CALP にまで拡大して考えると、我々の研究領域はさらに広がるだろうと言う結論に近づきました。そして、「どう教えるか」の問題の重要性を主張しました。我々の研究領域をさらに広げ、我々の研究の貢献する分野を一層拡大することは重要なのではないかと思います。

